

時間がない 惨状知って

風化と闘う

ヒロシマ 見つめる県人たち

〈下〉

見附市に住む広島原爆の被爆者、大坂剛三さん(88)には忘れられない出来事がある。10年ほど前、20、30代の若者が集まった講演会で被爆体験を話したときに、参加者から「召集が嫌なら断ればよかったのでは」と言われたのだ。

「断れば無事ではいられない。戦争を知らないんだ」と思い、強いショックを受けた。だが、その後も小学生らに体験を語り続ける。「戦争が家族や友人の命を奪うということを理解してもらうには、(伝える)回数を重ねるしかない」と思うからだ。

19歳のころ、船舶通信隊員として広島市に入った。兵舎で寝ているときに被爆。脚の皮膚が熱風で溶けたが、無我夢中で逃げた。「みんな、逃げる途中で建物の下敷きになった人と

被爆者

かを見てきたけど、助ける余裕がないんだね。後で悔やんだ」

集団的自衛権の行使容認で、日本が再び戦禍に巻き込まれるのではないかという思いを強くしている。「よその国では実際に戦争が起きている。自分のことに置き換えて考えないといけない」。69年間続く不戦の歴史が忘れられてしまいそうな風潮が怖い。戦中を思い出し「情けのある戦争なんてない」と唇をかんだ。15歳のときに被爆し、左目を失った寺前妙子さん

平和とは
新潟から問う

進む高齢化 伝承に危機感

(84) 広島市にも3度のがんと闘いながら、「原爆の恐ろしさを知ってもらいたい」との思いで語り部を続けている。

広島では自身の証言を継承しようと2世、3世の活動も盛んになってきた。平和を求める動きが確実に引き継がれている一方で、寺前さんは、日本と近隣諸国との緊張が高まっていることに不安を感じている。

「安倍(晋三)さんは絶対に国民を守ると言っている。6歳のときに被爆。原爆投下から2年半で、放射線障害とみられる症状で両親と祖母を亡くした。今でも「原爆がなければ家族を失うことはなかった」という思いが消えない。

こと5月には、長崎市で修学旅行の中学生が長崎原爆の語り部に対して「死に損ない」と暴言を吐くなど、原爆、戦争体験の風化の波が迫っている。

長崎原爆の被爆者、松沢美枝子さん(76)は長岡市に中学生の言葉に驚くと同時に、教師がとがめなかったことを嘆いた。「原爆は一瞬にして人生を狂わすというのを、大人はもっと教えないと」

(この連載は報道部・川上あすかが担当しました)



反核運動に参加したときに使っていたゼッケンを前に「戦争は全てのものが被害を受ける」と訴える大坂剛三さん＝見附市